第二百三十七號
明治三十二年二月十四日第三種郵便物認可
大正三年十月十五日發行（毎月十五日）

◀軍國民の必讀すべき書◀

天晴會講演錄

（第貳輯）（價格金貳圓也 郵稅金拾貳錢也）

▼本書は現代知名の諸先生が日蓮上人の人格及教義の研鑽を發表したるもの、日蓮主義が眞理批判の上に。また國民思想教養の上に。殊に國家存立の關係に於て、如何なる地位と權威とを有するかは。須らく本書六百餘頁に亘る金玉の文字によつて之を知るを得べし

内容
林陸軍中將。本多大僧正。井上中佐。小笠原子爵。小林文學士。高島平三郎先生
辻文學博士。松森僧正。五島子爵。姉崎文學博士。柴田一能先生。竹内久一先生
田中智學先生等の講演也

精神の修養
思想調整

（各一部 金貳拾錢也）
（二部 小包 金八錢）
（一部 郵稅 金六錢）

本書は本多日生師の海軍大學校における精神講話にして。帝國軍事教育會に於て印行したるもの。思想問題に注意を拂ふものは必ず本書を一讀せざるべからず

▲申込——東京市小石川區白山前町十七番地 三上義徹。送金は（振替口座東京二八八四〇）（郵へ拂込む事）

拾壹月號
第二百三十七號

統一

在鄕軍人と士氣振興　男爵 陸軍中將 黑瀨義門

我邦の使命と日蓮主義　大僧正 本多日生

日蓮門下七教團統合成る

佛教の尊儼と世人の安見　辯護士 久富勘太郎

▲百七十五年以後の日本▲日宗教團有志大會▲決戰と持久力　三上義徹

▲歐洲大戰と面白き統計▲慚愧の美服▲國民思想動搖の原因　文學博士 藤井健治郎

急告

縮別 妙法華經並開結

第壹種 紙裝 正價金貳拾錢 郵稅金貳錢
第貳種 布裝 天金 正價金四拾五錢 郵稅金六錢
第參種 皮裝 三方金 正價金六拾錢 郵稅金八拾錢

▲文明人は最高の思想に接觸するにあり、法華經は最高文明の中樞也、日本人は文明人也、故に本書を備へ之を精讀すべき也、菊半截判にして携帶に便也

法華經講義

洋裝全二冊二千餘頁
定價金參圓郵稅金拾六錢

本書は本多大僧正が心血を灑いて著されたるもの、日蓮主義を研究せんとするものは必ず本書を一讀して甚深の妙義を味ふべし、未だ本書を讀まざるものは速かに座右に供へよ

▲橘香集並製（金拾錢 稅貳錢）勤行作法（一部五錢 稅貳錢）製本出來△

日蓮門下七教團の統合成る

六百有餘年の間、分裂割據の狀態に在りし聖祖の門下、茲に閻浮統一の大願を遂行すべき法運は熟し、各教團志士の熱烈なる道念は、佛祖照鑑の下に相通じ、遂に十一月八日、聖祖鶴林の靈地池上本門寺に於て、七教團の管長及代表者は、敬虔なる至誠を以て神聖なる會議を開き、左の宣言を發表し決議を爲すに至れり

宣言

伏して惟ふに我
聖祖肇めて立教開宗を閻浮に宣し給ひしより、茲に六百六十有餘年、斯間、門下各教團の先匠前哲互に相發揮する所あり、一乘の幽を闡き本地の微を顯はし、教學の規を示し信仰の範を垂れ、以て克く萬年廣布の宏業を繼承し

給へり、芳躅の蹤は各〻異なりと雖、法水の源は乃ち一なり、僉な本化薩埵逗縁赴物の意にして、齊しく

聖祖の心を以て心と爲す至公至愛の慈化なるに非るは無し、然るに末弊の趨する所、動もすれば水魚の念を忘れ、兄弟牆に鬩ぎて外其侮りを招がんとす、洵に歎ずべきの至りなり、今や人心惟れ危く道心惟れ微、加ふるに世界未有の大鬪諍を以てし、五濁の興盛其の激甚を極む、佛記の徴已に現れ、聖讖の證全く應ぜり、嗚呼是れ我が本化門下の方に奮然蹶起すべきの秋に非ずや、決して瑣々たる舊套に拘はり、區々たる情謂に泥みて、斯の法運嘉會の一大好機を逸去せしむべきに非ず、須らく直に各教團の融合歸一を斷行し、異體同心の聖訓を體讀し、以て速かに王佛二法の冥合を成就し、閻浮統一の大願を滿足せしむべし、是れ

聖祖及先匠前哲の心にして、則ち法國の恩に報ゆる所以の大義なり、夫れ一乘薩婆若の大海には衆河の名字を許さず、本地常寂の大虛には唯だ一の天日あるのみ、何の踏跙逡巡する事か之あらん、茲に門下各教團管長及代表者相會し、佛祖照覽の下に、虔で左の事項を決議す

決　議

一、經判の聖旨に順ひ人心の推移に鑑み、日蓮門下各教團の統合歸一の實現を期する事

一、對外的布教に就ては、最善の方法に由り各教團の間に聯絡一致の行動を取り、又教育機關に就き適當なる施設を講究する事

一、前項の實行方法を審議する爲め、各教團より公式に交渉委員を選出して之を協定せしむる事

右決議候事

吾人は以上の未曾有なる淨業を讀者に報ずるを幸榮とす、

『父母の頭を刎ん念佛申さずば、なんどの種々の大難出來すとも、智者に我義破られずば用ひずとなり、其外の大難風の前の塵なるべし』

と、この天地を貫く底の殉道の大精神、その大活動の中に天地神明の力を包める雄大なる持久力が顯はれて居るではないか、斯かる徹底的犧牲の態度は、即ち偉大なる持久力より產み出さるゝのである、然らば日蓮上人の持久力は如何にして養ふを得たるか、別に面倒なる方式があるのではない、人格的大慈悲の本佛に恭敬渴仰して得たる妙力である、靈感靈應の力である、而して渴仰の關係は、久遠本佛の實在的救濟を信じ身心一如の上に南無妙法蓮華經と唱ふるに在る、唯だ此の一事行あるのみ、この一信行は、强固なる確信を生み、猛烈なる實行力を與へ、さらに本佛の無限活動力が現在自己の全體の中に包藏せられ、茲に持久力は躍動して制限の荊棘を拓き、運命の鐵鎖をも緩め得るに至るのである、總て人生の生活及事業には確信を要する、確信には强き力がある、何ものも之を抑ゆることが出來ぬ、牢乎たる確信の下に奮進するの時は、萬物みな風靡せざるものはない、若しや確信の力弱ければ克己の力なく、自らを支え得るの力が無いのである、日蓮上人は殉道的信仰を以て、あらゆる千艱萬難を耐え忍んで天分使命を果されたのであるが、其確信を披攄して

『心に法華經を信ずるが故に梵天帝釋をも恐ろしとおもはず』

と言ひ、確信の前には艱難何するものぞ、艱難は無氣力者を驚動するを得るも、確信ある人に對しては有益なる刺戟である、試金石である、人生成敗の分岐點は茲に存する、土臺の强固を缺ける建築が一陣の强風に倒れ易いと同じことである、されば一時を糊塗する小刀細工は人生の上に大禁物である、人生の意義ある成功は胡魔化しては出來るものでない、必然的に發展成功を收め得やうとするは無謀である、精神的に强き權威ある持久力の訓練ありてこそ、不滅の成功を奏し得るのである、日蓮上人が

『强盛にはがみをなしてたゆむ心なかれ』

とは、持久力の根本修養を敎へたる警句である、持久力は一切の決戰に於て最後の優勝者である、この力の充實は、實に人生生存上の重要條件である、ことに敵と砲火を交へて肉團戰を行ひつゝあるの時、持久力の修養充實は軍國民の急務なりと信ずる、而して修養の方法は、斷片的にして權威なき一切の材料は、思想系を搔き亂す虞れあるを以て之を斥け、二十年の修養と三十年の奮鬪を以て活動軌範を遺されたる日蓮上人の人格及敎義が、いかに軍國民の士氣に旺盛なる持久力を與ふるか、敬虔の精神を以て實地に日蓮上人の靈格に感孚し、軍國民の胸量に無限の持久力を包藏せよ。

我國の使命と日蓮主義

大僧正　本多日生

凡そ世に存在し居るものには何等かの使命を持たぬものはない、如何なる階級に生活するものであつても生活の其處には必ず使命があるべき筈である、然るに相當の地位に居る人が其使命を忘れて居るものが多い人間は何の目的もなく生れて來たので、終には枯木が朽ちる樣に死ぬものであると云ふ樣な意見を、堂々たる學者紳士の間に言はれて居るのを聞きまするが、是等は人生觀の何ものをも理解せざるものであります、一言にして云へば、宗教心の缺乏から來て居るのである、宗教は淺見者流が考へて居る樣なものでなく、第一は存在の意義を示して居るのである、物があれば必ず意義がある、而して其目的に向つて進めよと教ふるものである、即ち人間が世に處して何を目的として進むべきかを教ふるのが宗教である、然るに、物に存在の意義を認めず、唯だ盲目的に生活するものは實に恐るべき思想である、近頃唱ふる社會主義享樂主義よりも、更に一層危險の分子を含める惡思想である、之等は健全なる國民思想の敵であるから屠らなければならぬ、佛教に存在の意義を如何樣に示すかと云ふに、一切の物は意義無くして生ずるものはなく、生ずるには生ずるの緣起あり、一事一物の存するも進むも皆意義ある事を說明して居るのである、人生の方向を示したのが佛教である、玆に其一實例を云はゞ、維摩居士の娘が道に舍利弗と値ふた事がある、舍利弗が、貴女は何方に行きますかと尋ねたら、自分は舍利弗の行く方に行くのであると答へた、違つた方面より來て値ふた

のであるのに、舍利弗の行く方に行くのでありますと云はれたから合點が行かなかつた、處が彼女は說明して云ふのに、目前の事柄は違ふては居るけれども、其精神は何れも大目的に進んで居る、即ち大涅槃に向ひつゝあるものである、一切の事皆努力向上せざるものはなしと云ふのが月女姫の答でありました、如何にも萬物悉く無意味に存在するものはない、之を今日の科學上の細胞より見るも少さきものも其れ自らの活動をなして居る、胃は胃の働きをなし、心臟は心臟、肝臟は肝臟、全身の部分が皆活動しつゝ居る、之れ即ち佛教の緣起の說明である、此緣起に就て世人は善とか惡とかを付けて勝手に緣起が惡いなど云ふて居るが、緣起は皆善でなければならぬ、此の緣起ある所は必ず意義があるのである、意義があるならば亦尊き使命あることを自覺せなければなりません、古來志を立つと云ふ事がありまするが、立志とは自己の使命を果たさんとするのである、道德を天下に明かにせんとせる孔子の如きは、道德上に使命を自覺したものである、即ち自ら道德の標準とならんとした、我出てずんば人生の方向を如何にせん、との自覺に立たれたのである、又孟子は先覺者と成つて後進者を導かんとしたのであるが、先覺者は針の如く後進者は糸の如きものであるから、先覺者が大切である、先覺者は誰ぞ我斯の任に當らずして誰ぞと云ふて居る、孟子は此の自覺に由て其人格を成したのである、日蓮上人は日蓮無くんば日本人は盲目となる、此盲目を開き地獄の道を塞がんと仰せられて居る、斯かる事を自分の使命と考ふる處に發憤興起して修養を積み後代に名を成すに至るのである、一人にして尙ほ且つ然りである、然らば國民の身心を結合して國を成し、然も二千六百餘年旭日昇天の勢を以て世界に存在して居る日本帝國が、雄大なる使命無くして止むべけんやである、我國が世界列强の間に立ちて天下を光宅すべき大使命ある事を考ふべきである、然るに此の意義を明かにせず、唯だ國家存在の上より國家主義を唱ふる如きは、國家成立の根本に思ひを致さゞる盲目者流である、日本人は公正なる見

地に立つて日本國の使命を明かにする事が必要である抑も日本國は如何にして成立したるか、近頃の學者は太古の時アイヌ族が居つたが、それを天孫民族が征伏して國を成したと云ふのである、即ち日本の使命は神武天皇の時に清んだのであると言ふて居る、けれども日本國の使命は決してそんなものでない、日本國家の使命は教育勅語の上に、『皇祖皇宗國ヲ肇ムルコト宏遠ニ德ヲ樹ツルコト深厚ナリ』と示されて居る、之は如何なる意味であるか、唯だ單に遠い深いと云ふ位の事では其意を知る事が出來ぬ、何處に日本が高い意味があるのか、何故に宏遠と云ひ深厚と云ふのであるか、日本人はこの聖旨を明かに意識して置かねばなりません、日本人が漫りに他に壓迫を加へたり、又は利益を得んとする如きてあつたなら、勅語の聖意に背くものである、彼の獨逸の如きは先進文明の國として賞して居つたが、カイゼルの行爲の如きは海賊の國體と云はねばならん、日本の國は左樣のものでない、之を形容して或は聖德と云ひ或は俊德、元德、允德等と云ふのである、故ニ德ヲ樹ツルコト深厚ナリと云ふ所以である而して其内容を云へば正義である、征伏を以て國を成したと云ふ如きは第一義を忘れたる盲說である、神武天皇以來養正心を以て根本として居る、其養正心と云ふ中には、甚大なる意味が包含して居るのであつて即ち大業を恢弘すると云ふ事である、日本は天業を恢弘する爲に立つて居る國である、偉大なる理想を以て存在して居るのである、天は「天道人を殺さず」と云ひ、即ち萬物の生成化育を云ふのである、如何なるものと雖も之を犯す事の出來ぬ力を持つて居る、嚴と愛との調和を以て萬物を擁護するのである、故に天下を光宅すると言ひ、光を與へ宅を與ふる事である、光と家とを與ふるは正しく人を養育する事である、之れ天祖伊弉諾伊弉冊二尊に詔して眞に使命を果せよとの神勅である、又更に、蓋し六合の中心かと勅りを下し玉ふてある、六合とは世界の事である、日本を世界の中心と云ふのである、蓋し地理の中心ではなく光の中心である故に日本を中津國とも云ふのである、之れが

日本の使命である、日本帝國存在の意義はこゝに存する而して之れが正義である、此正義は或る學者の云ふ婦人の愛の如きを云ふのではなく、愛の中に嚴がある適當に嚴愛の調和を圖られて居るのであるが、學者の間にも宗教徒の間にも此意義を知るものが少ない、此嚴愛調和が我國の神武である神武は正義を以て邪惡を掃ふの義である、日蓮上人が正義の爲に權教邪法を破られたのが即ち之れである、之れは孔子よりも耶蘇よりも尊い處である、而しながら正義を弘むるには寸善尺魔と云ふ事がある、日本國が此正義を立つるにも必ず魔があるけれども、その魔軍と戰ひつゝ之を遂行するが日本國の使命である、又此神武を行ふにも、人間には衣食住の必要がある、故に民を愛する即ち愛民と云ふ事が起る日本には代々の天皇皆愛民の念に富ませられて居りまするが、特に仁德天皇に依て表はされて居る大御心には、民家より立ちのぼる煙を見て朕は富めりと仰せられた、「民の富めるは朕の富めるなり」との御言葉は小學兒童もよく心得て居る事である、仁德天皇は民力休養の上に三年の租稅を御免しになりましたが、之れ愛民の精神である、之れが宗教的に現はるれば精神の慰安となるのである、斯の如く愛民の精神を經濟的に現はしたが、次ぐに此國を武力を以て守るのである、茲に富國强兵が實現するのである、之れ一に正義を表はさんが爲である、之れが爲に日本國は皇統連綿として世界の中心たる意義があるのである、支那の如きは天皇系が三十七遍も變つて居る、日本は神武天皇以來變化する事がないのみならず、今日以後も千代八千代に苔の生す迄變る事がない、之れ即ち國家の使命を果す爲てあるからてある、善を行ふ所に尊嚴なる所以を存するのて、單に經濟のみの豐富を計るとか軍備のみの充實を期すると云ふならば、日本神武の意義を汚すものてある、凡て活動の上には經濟は大事てはあるが、正義實現のための經濟てなければならぬ、今日の戰爭に付ても經濟は第一てある、又科學工業の勃興にも大いに必要てはあるが、而し之等は正義の爲てあると云ふ事を忘れてはならぬ、正義を離れては何

事も出來得るものでない然るに先きには正義で在つたが、今度は正義を顧みる暇なしと云ふが如きは價値の無い主張である、正義は常に道德を生み、終始一貫背馳する所がないのである、日本には常に正義と道德がある、故に天下光宅の精神と皇統連綿の權威を以て、正義を蹂躙し道德を破壞するものを懲罰するのである如何なる場合に於ても、正義神武斷決愛民の精神があるのである、而して之を果さんには、道德武力及び人情風俗の上より世界の模範とならねばならん、宗教も科學も世界の模範とせんとする處に非常なる努力を生ずるのである、之れ永久に變らぬ精神である、此意味を忘れて居るものは日本を忘れたのである、此點は地位身分の差なく同一の精神でなければなりません、亦如何なる人でも立派にこの光を現はす事が出來るのである、此思想は法華經に說てある、それは各々の處に皆光があるので、努力によりて發揮することが出來るのである、長者の萬燈貧女の一燈と云ふ事がありまするが五貫目を持つ力ある人が之を持つも十五貫を持つ力ある人が之を持つも同一である、さうしてそれが國家の使命と結合せねばならん、學者としても日本國の使命を意得しなければ日本の學者ではない、宗教家としても日本國の使命を忘るゝ者は日本の宗教家ではない、日本人たる以上此使命を全ふせんければならんが其職分を果す上に何が大事かと云へば、第一に剛健と云ふ事である、日本人は强健の力を持たねばならぬ

事しあらば火にも水にも入らばやと
おもふはやがて大和たましい

大和魂は火や水に飛込んでもビクともしない力である此剛健の結果は不撓である、一度は剛健でも、中途に腰の折れる樣では駄目である、兎と龜の話の樣に、初めは威張つて居つても中途で晝寢をやつて居つて、時過ぎてから、之れはシマッタと云ふた處で取り返しのつくものでない、如何なる困難あるも押切つて遂行するの精神である、先帝陛下の兩垂の石に穴を穿つを御覽なされて、大和魂も斯樣に修養せねばならぬと仰せられた、而して剛健不撓の中に快活の精神が湧いて

來る、剛健と云ふても鬼の樣では不可ん、剛の中に快活が必要である、兒童の教育には尤も之が必要である江戸ッ子にも之を具へて居つたが、次第に剛が減り不爽が薄らいて居る、武士の妻は夫が戰場に出かける時にも、お目出度と云ふて身送りする、後では泣くかも知らんが其時は決して泣かぬ、之れは日本の特性で、支那の如きは大いに泣く、死人でもあると家内の人が泣く許りでなく、五人も十人も人を雇んで泣いてもらう、西洋でも泣く、ルーテル程の人も泣いて居る、ヤソの如きも泣いて居る、日本人は泣いても泣かないのである、この快活の精神は非常に大事であつて、特に軍人は志氣が最も旺盛で快活でなければならん、志氣の旺盛は軍人許でない國民一般に最も必要である。

日蓮上人は何うであるか、上人は日本人なるが故に泣かぬ、鎌倉龍口の四條金吾が情逼りて御別れは只今なるかと泣いた時に、日蓮上人は不覺の殿原かな此程の喜びを笑へよかしと仰せられた、又四條金吾夫婦が法華經を信ずる處から主人より勘當された事がある此時上人は門出の心得を示されて居る、法華經を信ずる故の勘當なれば、家財眷屬等は大法に布施すると思ひ、門出の時には夫婦揃ふて花見にても行く考へになつて多くの人が羨やむ樣にしなければならん、若し左樣にして出る事が出來なければ止めるがよいと申された四條金吾は敎の如く少しも違する處がなかつたので主人は四條金吾の意志を聽さん爲に勘當したものゝ、其不動の精神に感奮して勘當を許したと云ふ事は事實である、笑ふ門には福來り泣く家には禍の來るものであるが、設え敵の爲に包圍されても泣くやうでは駄目である、何處迄も正義の爲に此程の喜びを笑へよかしと云ふまでにならなければならぬ、然し元氣ばかりではと云ふ人もあるかも知らんが、日本人は何處迄も元氣であるを要する、この元氣を以て道德及宗教上より日本人をして國家の使命を全ふせしむべきであるが之れには日蓮主義が大いに力ある宗教である、儒教にも其意の不明の點がある、儒者にして此大使命が日本に存する事を唱道した人は一人もない、佛教中にも蓮

如上人が王法爲本を唱へたが、此使命は解つて居らない、唯だ宗派の存在の爲に便宜的に言ふたに過ぎないのである、基督教は國家と云ふ事を云ふが、知つた樣な知らぬ樣な極めて徹底せざる說明である、近頃多くの精神法話もあるが、此日本の使命と合して進む敎は獨り日蓮主義のみである、神武天皇以來、此の建國の大理想に向つて力を盡した國民は尠なかつた、日蓮上人が鎌倉時代に現はれて、堂々とこの使命を光顯されたのである、爾來六百有餘年、學者は輩出したけれどもこの問題に全力を盡した人はない、現代に於ても疾呼論道する識者がないのは遺憾の次第である、何も他國に遠慮する必要はない、日本は正義の爲に存すると云ふは憚る事はない、目的も使命も明かにならぬ國は眞實の發展を望むことが出來ない、而して此大責任は國民全體が負擔すべきであるが、特に日蓮主義者は大に發揮して行かねばならぬ、剛健の上にも不撓の上にも將た快活の點にも世表に立つの覺悟を要するのであります、又日蓮上人は『我れ日本の柱とならむ我日本の眼目とならむ我日本の大船とならむ』と申されて居る、國家の使命を果すべき自覺は、この高調に達しなければ解らぬのである、世の盲見者は此文を御符になし飲めば可いかともおもはれる、而して日蓮上人は口ばかりではない、事實の運動を爲されたのである、日蓮を倒す者は、日本國を倒すものなりと云ひ、識見高邁にして精神の剛健なる、現代人の以て大に學ぶべき所であると信ずる、又不撓に就ては、日蓮上人は奮鬪する事三十年其主義を宣傳する上に强硬なる態度でありました、多くの人は或場合或場合に興奮しても永續がない、軍人にしても喊喊する時は元氣であつても、永く續くと意氣の弱くなる事がある、日蓮上人は常に快活に生活して居られた、如何なる人でも牢に入れられ或は流罪されると氣拔するものである、初めは元氣でも二年三年の月日が經つと元氣が阻喪して仕舞ふ、藤田東湖が牢の中で、空は一面の曇り雨が降る樣な時には生き生きした考が出ない、此時に作つた詩は人に見せられん樣なのがあると言ふて居るが、日蓮上人は島に

流されても少しも活動を止めない、意氣益々盛である伊東佐渡の流罪の後には益々道と國との爲に働いて居る、釋尊の敎は日蓮上人に依て遺憾なく實行されたのである、法華經には此正法を弘通するものは或は惡口せられ燒打に値ひ或は死罪流罪にも行はるべしと說かれてある、上人は、法華色讀の行者であり、其の大難の來るべきは覺悟の上であるから、一難來る每に經文に符合せりと悅んで、少しも驚く樣な振舞はなかつた、之れ即ち信仰の生活である、佐渡流罪の日法華經の爲めに流されしを思へば此程の喜はないと云ふて居る、潮の滿つるが如く十六日の月の如くである、上人の流罪以前は十三日の月の如く佐渡の後には十六夜の月の如くである、流罪は上人の上に確信を强固ならしめたので、佐渡の寒苦と戰ひつゝ益々運動は猛烈を極めたのである、日蓮上人最後の決心は

縱令頸をば鋸にて引き切り胴には稜鉾を以てつゝきき足には鑿を打て錐を以て捫とも命のかよはんほどは南無妙法蓮華經と唱へて唱へ死に死するならば釋迦多寶十方の諸佛靈山會上にして、御契約なれば須臾の程に飛來て手をとり肩に引き懸て靈山へはしり給はば二聖二天十羅刹女は受持者を擁護し諸天善神は天蓋を指し旗を上て我等を守護して慥かに寂光の寶刹へ送り給ふべきなり

と幻影の如き現在の壽命を惜んで何かあらん、正義のために一身を捧ぐるは、やがて永久實在の不滅生活に入ることを思へば、努々退する心列れ恐るゝ心なかれと云ふ剛健不撓の精神が湧いて來るのである、此精神は日蓮主義に依て養はるゝのである、日蓮が弟子檀那は臆病にては叶ふべからずと警しめられて居るから臆病者は日蓮主義者でない、鎌倉當年大禁古の襲來は我國開闢以來の大事件であつた、若し十萬の大軍が博多より上陸されたならば一支へも支へる事が出來ぬ危ない時であつたので、國民は皆膽を潰して心配をした此時に當りて、上人は小禁古より大日本國に來ると叫んで、帝國の權威使命の上より恐るゝに足らざる所以を論明せられたのである、國を擧げて大騷きをして居

る時、上人は獨り小蒙古國何するものぞと言つて居る之れ實に上人の大なる修養の結果である、日蓮主義は此の如き人を養成するのであります、正義を弘むるには或は武力も用ふるが、正義を忘れたる武力は不可である、日蓮主義は立正安國主義である、何處迄も正義中心である、若し日本が正義を中心として事を爲すならば世界に誤まられる事はない、此自信力なくして如何して世界に雄飛する事が出來よう、今や獨逸は自國を利せんが爲に世界と戰つて居る、日本は正義のために戰つて居る、正義は最後の勝利者である、正義を旗印として戰ふのは日本の使命である、此點より考察し來れば、日本人の思想を養ふべき敎は、日蓮主義の外に求むることは出來ない、日本國の使命を思ふと共に益々日蓮主義の卓越せるを知り、國民をしてこの大主義の下に集注せしむることが大事である。

黑瀨將軍を訪ふ

天長佳辰の日、牛込納戸町に男爵黑瀨中將閣下を訪ひ、刺を通じて面會を求め洋館應接室の客となる、建物も室內の裝飾も至つて質素で華美の風は少しもない、書棚には軍事に關する洋裝の數十冊と、倫理社會學等四五の書籍の外に、笹川臨風氏の日蓮上人などがある、以て將軍の人格を知ることを得ると共に、其迫らざる態度は何となく奧床しさの感に打たる、將軍は岡山縣出身にして法華宗の家に生る日講上人の本尊を藏して居る、將軍云ふく『日蓮上人が一大修養を積んで、佛敎の中心である法華經を見出されたのは、其の當時の八宗九宗の存在して居る事が、發端疑念となつて、遂に佛敎統一の大事業を起されたのであります、從らば、上人の理想は總ての宗敎を歸一せしむるの理想であります、決して分立の狀態を許しませぬので、之れが爲には一代の奮鬪をなされまして普通の人には耐え得られない程の艱難に遇ふたのであります、それですから門弟たらんものは此遺志を繼がなければなりませぬ、然るに現今の如く日宗の敎團が、九派にも分れて居ると云ふのは少しも理由がない事である、少しは學問の見解が違つたにしても、從來の關係があるとしても、互に手を握り志を合して、法華經の信仰を傳へて行かなければならんと信じます、各派の統一は到に六ケ數しい問題ではない、早く其の實を擧げて貰ひたいと考へて居る、兎に角勢力ある團結を作り上げて、國民を救濟する事が第一の事業である』と言ひ終つて悠然たる事久し、記者また感を深ふして言ふ所を知らず、時正に四時、其の厚意を謝し暇を告げて歸る(三上生記)

在鄕軍人と士氣振興

男爵陸軍中將　黑瀨義門

世界の上に國を成して居る數は多いのでありますが、其列國對峙の間に立つて、或る偉大なる天職を保有して之を實現せんとする我帝國は、其責任の重大なるものがあるのであります、從て國民の堅實なる決心と用意とは、戰時に於て尤も必要なる事であるのは勿論であるが、果して國民の覺悟が定まりて居るであらうか、亦今日の時局に對して何う云ふ風に見て居るのであらうか、多數國民の時局觀は、區々に分れて自分勝手の考察に依て居る樣である、或人は青島攻擊の勝利に依りて戰局を告ぐるものであると考へて居る樣であるが、それ等は未だ考の足らざる所がありますので戰局の結末が青島の勝敗によりて決し得るものではない、この戰局が比較的迅速に解決が付きましたけれども、其處に國家の上には大影響の存するものあることを忘るゝ事が出來ぬ、果してこの戰局の影響を受くる上は、國民は非常の覺悟がなければならぬ、現に獨逸が世界の强國を相手として戰つて居る、其國の老幼男女共に一致の動作を以て祖國のために盡して居るが、之は國民の精神結合の然らしむる所以で、敵ながらも參考とするに足る、此の結合を圖り之を指導したものは誰れであるか、之は言ふまでもなく獨逸の在鄕軍人である、在鄕の軍人が國の中堅となり國民の思想を一致せしめ、而して其團結の力を以て國難に當りて居るのである、この獨逸に於ける共同精神の起原は、曾て普佛戰爭の當年、獨逸軍が戰勝の榮譽を擔ふて凱旋の途中、獨逸皇太子は自から在鄕軍人の會長と爲つて、

國民の中堅は在鄕軍人に在るの旨を示したから、此意を體して今日に至るまで、一致結合の實を擧げて居る次第である、そこで今日の戰爭は常備軍のみが戰ふのでなく、在鄕軍人が中心となりて戰ふのである、何處の國でも常備軍は少數で、在鄕軍人は大多數である、之等の關係より考ふれば、在鄕軍人が國家の中堅指導者となり、良民中の良民は在鄕軍人であると云ふ立場に進み來なければなりませんので、今日の獨逸は明かに此の事實を語るものと考へられる、彼の獨逸の社會黨などは、平時は事毎に國政の方針に反對して居つたのであるが、世界の列强と交戰狀態になるや、百三十萬の社會主義者が一致して戰爭の爲に働いて居る、青年團體の方よりは義勇兵を出して居るから、常備在鄕の軍人五百萬を合せると七百萬の兵が動いて居る、之等の事を考ふるも、兎に角獨逸は國民一致して國難に從事して居るのである、而し我輩は之に由て勝敗の如何を論決するものでないことだけは斷つて置く、唯だ我帝國が今後の世界列强に對抗して、最後優勝の地位を占むるには、必ず先づ內に國民の結束を堅實にして置かねばならぬ事を感ずる、さうして軍事に教育に殖產工業に力を注ぎ、元氣旺盛國力充實するに至らば、戰はずして敵を制し勝利を得べきは明かなる事である世人が今日の時局に對し、單に膠州灣の獨兵のみを敵と見るのは、未だ世界の大局に通曉せざるもので、我國運の勃興に伴ふて拮抗すべき範圍の擴大せらるゝ事を忘れてはならぬ、斯かる重大なる地位に立つて居る帝國は、國民精神の統一を圖ることが刻下の最大急務である、今正に其時機であると信ずる、それには國民の中堅となるものがなければならぬが、在鄕軍人が實實なる軍人精神を以て其中心となり、軍人勅諭の聖旨を奉戴して身自から之を行ひ、以て國民精神の歸向を示すことにならねばなりません、このたび天皇陛下には、十一月三日陸海軍の在鄕軍人に勅語を賜ひ、且つ在鄕軍人會に御下賜金の御沙汰を下し給へるは、聖慮の深きに感泣する次第でありまする、謹て聖旨を拜察致しまするに、在鄕軍人は帝國軍編成の要素にして

其强弱は國軍の價値を上下するものなれば、益々軍人精神を鍛錬し、軍事技能を增進せしむるの必要あり在鄕軍人の教養の振否は、國軍勢力の强弱に大なる關係を來たすものなるが故に、其一層の發達を望ませ給ふの叡慮に出でさせ給ふ事と感激措く所を知らざる次第である、在鄕軍人は此の聖旨を體して、愈々其精神を教養し結束を强固にし、眷々服膺して奉答する所がなければならぬ。

現代は泰西の文物輸入の結果、極端なる個人主義とか自由主義とか、其他の危險なる思想のために、青年の精神より忠孝道德を奪ひ去られんとして居る有樣も見へる、それ故に忠孝道德の實行力が鈍くなり、從て親に對する孝道をも辨へざるものさへ現はれて、親の大恩を難有いとも辱けないとも思ひ居らざるものが、どうして一人並の人格を具へたものと申すことが出來ましようか、斯樣な青年が殖えて來ると云ふ事は、誠に人の爲め國の爲めに歎息に堪へざる次第でありまする、過般大浦農商務大臣の九州を廻られた時、或商業學校に於て、日本に一番大切なる御方は何方なりやとの問に對し、誰れも至尊なりと云ふことを答へたるも其次は誰れなるやとの問に對して、滿足に答へたるもの一人の外なかりしとの事なり、之等は未だ親の恩の深さを感ぜざるもの、如何に教育を受けて智識は進んでも、忠孝の大道を辨へざるに於ては人らしき人と云ふ事が出來ない、百行の土臺は孝道である、その孝道を全うするを得ざるものは、朋友に對して信義を守ることも出來ず、兄弟に對して悌愛なることも出來ず、況して上長に對して恭敬に、君國の大事に對して忠誠を捧ぐることが出來やうか、斯樣な心懸けてあつては億兆心を一にして協同の動作を爲す上に、甚だ力弱くして充分の效果を擧ぐることが困難である、我帝國は億兆一心忠孝兩全の調整せる道德であるから、總て一致結合せなければならぬ、日蓮上人の仰せに『異體同心なれば萬事を成就し同體異心なれば諸事叶ふ事なし』とありまするが、實に千古の格言でありまする、國運發展の任に當る青年は、國民の道德を養ひ意氣を旺盛

にし、耐忍の精神を作興するに努むることが大事であります、單に理窟だけでは役に立ちませぬ、如何に理論は巧妙でありましても、人格を立派にするには何等の效がありません、道理を識別する判斷力の修養を疎略にしてはならぬが、躬行實踐致しませんければ人格は完成することが出來ないのであります、日蓮上人の教へられたる『色讀信行』でなければなりませぬ、さうして其の國民精神の中心が確立して居りますれば、假し外來の思潮が押し寄せて來ようとも、其正邪を決定して採否宜しきを得、帝國民たる自覺に立つて忠孝の大道を履み行ひ、堅忍武勇の精神を鼓舞して國難に當らば恐るゝ所はないのである、斯くの如く各自の自覺と抱負とを以てせば、國運の發展に貢献する所多大なるものがあると信ずる。（閣下の談話を記者の手記したるもの、文責在記者）

百七十五年以後の日本

▲建部文學博士云はく、『我帝國の國是は天孫降臨の際に下し給へる神勅に依て明かである、而して國民は如何にして皇運を扶翼すべきであらうか、總ての上に發展を計圖し實現すべきは勿論の事でありまするが、現在の日本は六千萬の人口である、之が平均一ヶ年百人に七の比例にて增加するならば、百七十五年には十億の人口となる、地理的に十億の人口を生活せしむることが、今の日本の領土で出來るであらうか、到底領土主權內に容るゝの餘地おない、然らば現在以上に人口を增殖することを許さない方針を取るか、それは人間の本能的人道的の方面に於て許さない、のみならず帝國の國是實現の上より斷じて不可である、されば領土の擴張を爲さればこの增加すべき人口を容るゝことが出來ない、處が日本が南洋の一島を占領すれば或る國が神經を起す、一人を增さんとせば他の一人を減らさなければならぬ、世界の一等國と云ふ國は、他の土地に手を伸ばして遂に主權領土にして居る、進化の通勢より見れば國の數は段々無くなつて現在の一等國よりも强大なる國が出來るともおもはれる、日本が此の人口增加率を以て行くならば、百七十五年以後十億となる、十億位の人口を有するを得ざれば一等國となることを得まい、十億の人口居住には我領土の範圍にては足らない事は明白である、よし殖民政策を以て他國の領土に移住せしめたにしても、自國領土內に居住するのとは結合力が違う、その移住者の一人の力が內國人の一人の力だけあるとは言ひ得ない、そこで何うしても領土擴張を必要とする、而しそれは野心を逞ふする爲てはない、野心は或欲望を達せんが爲に充たされた心狀であるが、我國が領土を擴張せんとするの必要は、帝國の國是として天業を行ふ上に於て、且つ文明の惠澤を世界に推し及ぼして行く上に於て、天の命ずる處として領土の範圍を擴大せなければならぬ、兎に角百七十五年以後には、現在增加率にて十億の人口となるから、今日より充分の用意をして置かればなりませぬ』云云（三上生手記）

◎歐洲大戰と面白き統計

▲地球一周に足る兵員　現時歐洲の大戰に參加せる獨佛墺露英を始めとして、塞爾維、黑山國、白耳義諸國の從軍者を合算すると、其數凡そ二千萬人である、試みに此の二千萬人が平均六呎の身長を有するとしてそれが凡て足を延ばして一列に寢たとすると其の延長は一億二千萬呎即ち二萬二千七百二十八哩に及ぶべく其の長さは殆んど地球を一周するに足るものである。

▲日々二萬五千噸の食糧　更に此の二千萬人の從軍者を假りに太西洋を橫斷して米國まで輸送するとすると、例の五萬八千噸を有し現時世界第一の汽船たるフアタランドの大汽船五百八十五隻を要し、各人皆平均日々二封度半の食慾を有する常人と見ると、之が爲めに費さるゝ日々の食糧は五千萬封度即ち約そ二萬五千噸にて、此の莫大なる食糧を各二十噸積みの貨車に積むとすると、貨車八百三十輛を連れた大列車をなすべく、此の貨車が假りに皆な六十呎の長さを有するものとすると、此の一大列車は殆んど十哩の長さをなし、之を動かす爲めには二十輛の機關車が要せらるゝ割合である。

▲釦二千噸、家畜二千五百頭　それから此等從軍者の爲めに要する軍服は凡て平均三ヤアドの羅紗を要するとすると其の全長六千萬ヤアドか繋げば全長三萬四千哩に上り、地球の周圍の一倍半に相當し、此等の軍服に使用さるゝ釦の總量は二千噸にて、之を運搬するには千頭以上の馬を要するのである、而して此等二千萬人が日々一斤半の肉類を食するとすれば、其の全量は三千萬封度一萬五千噸を消費し、此肉類を供給するには日々二千五百頭以上の家畜が殺さるべく、尙ほ此等二千萬人の軍隊を以て觀兵式を行ふとすると、一聯隊を一千人より成るとしそれが四列に列んで巾十呎、長さ千呎を要するとすれば、全體に於て三千八百三十七哩をなし、各住が四呎宛の間隔を置いて進むとすれば、此延長は二倍となり六呎を隔てたとすると三倍の長さになるのである。

▲一戰鬪の彈藥三千萬圓　最後に此の二千萬人に對して最新式の彈藥一發宛を供給するとすれば、百二十萬圓を要し、一挺宛の小銃を渡すとすると其費用は五億二千萬圓の多額に及び、激戰に於ては一人約そ五十錢平均の彈丸を費す割合なれば、全員が激戰に費さるゝ彈藥は三千萬圓乃至六千萬圓に及ぶのである、ところで一戰爭毎に破損若くは分捕などによりて失はるゝ武器は凡そ一割の割合であるから、二千萬人が一回の戰鬪に於て失ふべき小銃のみの損失は、約そ五千二百萬圓の多額に達する割合である。

佛教の尊嚴と世人の妄見

辯護士　久富勘太郎

▲佛教に對する妄評

世人の佛教に對する評論は、其人々によりて違つては居るが、『神道や基督教は現實的社會的であつて人生を指導するに足るけれども、佛教は厭世的未來主義であるから、現代の精神欲求を滿足せしむるに力なし』とは、佛教信仰を價値なしと喇けるものゝ妄評である然しながら佛教果して評者の言の如くであらうか佛教の經典は釋尊の五十年間に於ける思想の發表である、或は幽遠なる哲理あり、深刻なる人生觀あり、調整せる人倫の大道あり、萬象の事細大漏さずして、規律と歸向を示されて居るものである、時に對機關係に於てあまりに現實生活に耽溺して刹那主義に囚はれて居る樣な思想に向つては、其の者を救はんがために、人生の果敢さを說いて變遷無常の理を敎へた點もある、復た理想の一面に執着して現實の人生を蔑視する者に對しては、人生の價値を明かにして現實尊重の思想を示されて居る、夫故に、時に未來觀もあり現實觀もあり個人主義もあり平等博愛主義もあり、各方面の思想を網羅して說いて在るのでありまして、始め小乘より終り大乘に至る迄淺き敎もあれば深き敎もある、今の世人が現在形式敎團の佛敎中の一面を見て、直に佛敎が未來敎であると言ふ判斷を下すが如きは、不謹愼なる妄評であると言はねばならぬ、大膽も沙汰の限りと申さねばなりませぬ、又佛敎が、死者の祭りをするから陰氣である厭世的であると言ふ人が多いのであるけれども、是等は全く人生其物を考へざる者の批評である、

何故かと言へば、死と言ふ事は何人も避く可からざる運命でありまして、其死せる人格者に對する儀禮を行ふのが葬式である、夫故に葬式は人生最後の訣別式とも言ふべき者であります、從つて其儀式は、最も嚴肅にして神聖であらねばならぬので、此の儀式を掌るから厭世的であるとか陰氣であると言ふのは、少しも正當の理由を見出す事が出來ません、若し識者が人倫禮節の缺く可からざる事に思ひを致したならば、從來佛敎に對する妄評は誤りである事が解かるだらうと思ふのであります。

▲托鉢修行

は釋尊の在世に於て、苦行の一門であつた事は佛敎史の證明する所であるけれども、當時の修行は單に財食を求むると言ふのではない、敎を宣揚せんが爲に、熱心好く道を傳へ其報酬として財施を受けたに過きないのであるが、是は釋尊が弟子に對する生活上の自制律を示したる者である、而して此の托鉢は、小乘戒としては拒み得ざる律法であるけれども、大乘の本旨ではない、今や文運の進歩せる御代に、日本の佛敎徒が昔の儘の形式を墨守して、十數名の僧員が都大路に列をなして托鉢修行の擧に出づるは、時代の變遷を考察せざる者ではあるまいか、特に其托鉢の目的が傳道意義でなく、單純なる物質的關係なるに於て、一種の高等乞食の觀なきにあらずだ、列をなして經を讀みながら、鐵鉢の中に一錢二錢を入れて貰ふと言ふに至つては、讀經の價値も亦下落した者と言はねばならぬ、斯くては佛敎の權威を失墜して信仰の神聖を傷け社會風敎の躋一を紊す者があると思はるゝ、是等は社會の制裁力を以て行らぬ樣にせねばならぬと信ずるのであります。

▲宗敎に對する

考へに就いては、個人對絕對の關係であつて團體の發達とは何等の交渉がないと言ふ風に現今の識者は論じてゐる、如何にも宗敎內容の一面は夫れに相違ない、然しながら個人の解脫が高調に達し得たとしても、團體其物の改善進步を顧みない宗敎であるならば、宗敎存在の目的である人生及び社會の全體を救濟する事が不可能に

終るてはないか、固より日本佛教中にも個人成佛のみを唱へて、更に國家の消長を顧慮せざる眞宗や禪宗の如きもあるが、是等は宗教として低級に屬する者である、此個人對國家の關係に就いて、適當に解決を與へたる教義は日蓮主義である、日蓮主義は國家の成佛を主張し、一國の明教を樹つる者である、個人の解脫が根本でなく、國運の發展解脫が目的である、團體の爲には自己を犧牲とする思想である、日蓮上人の立正安國論には

『一身の安堵を思はゞ先づ四表の静謐を禱る可き者か』とは、此の思想を論明せられたる大文字である、今や世界の動亂に伴ふて思想上の自覺を要するの秋、かかる衝天の意氣を養ふ可き事は、識者の等しく痛切に感ずる處であらう。

▲國家尊儼

の眞理は、西歐思想を丸呑みにしたる結果として、之れに疑を挿し挾んて理論を構へるものもあるやうてあるが、苟くも日本の國民として國家の尊儼に疑を容るゝが如きは、建國の理想を知らざるに基くものてありましよう、誠に氣の毒てもあるが又恕すべからざる思想てある、西歐の國家は民本主義て成立つて居る、人民中より政治上の勢力あるものが主權者となると云ふ制度て、人民が本位となつて主權者は其機關てある、此原則の上に現はれたる政治史によりて、我日本の政治を論じようとするなどは根本から間違てある、或程度までは參考としての價値はあるけれども、之に依て我國の神聖なる主權者を上下することは、帝國存在の理想體制に鑑みて愼まねばならぬことてある、我國は皇室絶對中心主義てある、皇室を中心として精神上事實上君臣父子の關係に在るのてある、それ故に國の精華たる忠愛の精神が、國民の血と肉を躍動せしめて、潔よく君國のために犧牲となるのてある、即ち是れ日本人の日本人たる所以て、大和魂の眞價てある、此の忠孝道德の神聖と實行との存する所に於て、我國の獨立及發展は强き權威があるのてある、今や世界の列强は激烈なる競爭の時機に到來して居るのてあるから、我國民は權威

ある國民的道德の力を充實することに努めなければなりません、西歐の文明は進步して居るからとて能く之を撰擇吟味したる上に採用するがよい、若し之を誤ると、國民の思想は歸趣を失ふことになる、之等は先覺者の尤も周到なる注意考察を要する點てあると思ふ

▲鑑機三昧

と云ふことが佛教に說いてある。

いかにも傳道の上には救濟者の狀態を觀察せなければ、折角力を盡しても何等の效果を擧げることが出來ない場合がある、而し此の機根を察することが、個々の救濟に全力を傾盡すると云ふことてなく、時代の支配する風潮は、如何樣に人心に影響を與へて居るか人心は如何なる徑路を辿りつゝ居るかと云ふ事を觀察して、之に決定的中心を示して進むべき針路を立つのが、即ち鑑機三昧てある、鑑機三昧の力がなければ獨斷的盲目的になつて、公正なる態度を缺くことになる、故に現代の如く、人心混亂して歸一を失ふて居る秋は、鑑機三昧力を以て進行の方途を示すやうにせねばならぬ。

▲因果の法則

は宇宙の大道てある、何物ても因果の關係を離れて成立つものはない、因果の外に存在せんとしてもそれは斷じて出來るものてありません、吾人の思想行爲の全體は、因果の法則に支配せられて居る、佛教に教ゆる『諸の惡は作す莫れ 衆の善は奉行せよ』とは、因果律より道德の實行を命令したのてあると思ふ、因果律は吾人の行爲に對して絶對の權力者てある、惡事を犯せばその良心を呵責し苦痛を加へ、善事を爲せは歡喜を與へて愉快を感ぜしむ、一種尊儼なる制裁がある、之が即ち大道てある、大道とは絶對普遍の條理てある、此の整然たる條理は人の守るべき道てある、この道に背くものが佛教に說ける邪見の人と云ふのてあるとおもふ、邪見の心が强くなると因果の觀念が無くなるから、品性は墮落し人格は劣等になるのてあります、故に自らを省みて因果則に悖らぬ樣に修養して行かねばならぬと信じます。

◀日宗七教團有志大懇親會▶

日蓮が末弟は水魚の思ひをなして道のために健闘せよとの聖訓は、六百年來空文字となつて居つたことは健全なる日蓮主義の發展に努力するものの遺憾に堪へざる所であつたのであるが、法運ここに熟せるか、從來疎隔せる關係は撤せられて、互に膝を交へて一堂に會し、其親情を温めて握手するの機運に會せるは、上は聖祖に對して我等の地位を明かにし、下は法國冥合の實現に貢献する所多大なるを信じ、欣喜踴躍措く所を知らざるものがある、十一月八日午後二時、池上本門寺二百疊敷の大客殿を會場として、日宗七教團の有志大懇親會は開催せらる、本化日將師開會を宣するや日宗大學の二十餘名の學生は國歌及宗歌を奉唱し、山田法學博士は發起人代表として一場の挨拶を爲されたが、博士の熱烈なる信仰の論辯は、教團統合の實現は聖祖の鴻恩に報ゆる所以なるを痛說し、門下の僧俗心を一にして救濟の目的に努力し得べき機運に會したるを祝ひ、日蓮正宗管長阿部日正大僧正は、統合の事業は全力を傾盡して實現すべしとの至誠を表白して祝意を述べ、宮岡海軍中將の祝辭あり、山川智應氏は田中智學居士の祝辭を代讀し、小林文學士は佐藤海軍少將の祝詞を代讀し、矢野檢事は發起人代表として祝意を表して式を終り、大客殿前にて一同撮影を爲し、客殿大廣間にて大宴會を開き、門下各教團の縞素二百餘名、互に胸襟を開いて所信を語り合ひ、談笑の間隔意は撤せられて交親しきを加へ、和氣洋々として握手提携の事實を呈し、何とも言へぬ床しさが場内に充ちて居つた、矢野檢事の閉會の辭に次て、本多大僧正の發聲にて陛下萬歳及聖祖門下の萬歳を三唱して、この清き理想ある大懇親會は終りを告げた、此の池上の靈地に於て日宗の史上に未曾有なる會合を爲し、更に水魚の思ひを爲して統一の實現を誓ひたるは、來會者の無限の幸榮であり、斯してこそ聖祖の使命を遂行することが出來やう。（白碧生記）

國民思想動搖の原因

文學博士　藤井健治郎

（十一月一日日本社會學院に於ける講演の概要を筆記したるものなれば聞き漏しの點もあるべけれど、極めて有益なりと信じ、茲に掲げぬ）

國民思想とは、國民的固有思想と云ふ意味か、而うてなく一般人生に對する國民思想と云ふ意味か、何れを指して居るか不明であるが、茲には一般人生の國民思想と云ふ點に見て、此の國民思想が動搖し又は動搖しつゝあると云ふ事は、容易ならざる重大問題である、動搖とは動いて定まらぬと云ふ意味でありますから國民思想が動いて定まらぬと云ふ事になる、動搖の事實は、吾人の感覺に映じて來る樣に動搖して居るか何うか、櫻島の爆發又は歐洲の大動亂の原因は分るけれども、思想と云ふものは、同一の事柄でも見方によりては動搖とも見へるし動搖せぬとも見ることが出來る、故に動搖とは比較的關係的相對的變化である、例へば平常海に慣れて居らない人は、海上少しの波を見ても波が高いと見るが、海に慣れて居る人は狂瀾怒濤であつても波がある樣に思はぬ、波があつても動搖とは見ない、而して動搖の原因が事實であるとしても、其眞原因を調査することは困難である、總て社會に於ける人事現象は相互關係であつて、互に原因となり結果となり、又時に結果となり原因となり、互に連鎖的關係に在るものである、例へば教育と社會との關係でありましても、教育の不振が社會道德の頽廢を來すことになり、教育の效果の擧らぬのは社會の風俗制度の

頽廢とも言へる、明かに一方は原因一方は結果なりとは言ひ得られぬのである、何處に因果の網が引き張られて居るか分らぬものである、明白に確的なる原因を提供することは出來るものでない、或ものは國民思想の動搖は宗教の權威が衰へたからだと云ふが、又一方より言へば、宗教の權威の衰へたのは國民道德の動搖があるからである、國民思想の動搖の事實は、佛教傳來以後であるか、又は西洋思想輸入以後であるか、此の分域を了解することは出來ぬ、嚴格に言へば現代と云ふ意味は何時か、現代と云へば既に過去である、桑木博士は現代を釋して七八十年前であると云ふて居るが、之は天保時代で現代でもあるまい、假りに明治維新以來と考へ得ることも出來るが、先づ日露戰役を區劃として最近十年間の動搖の事實を見れば分る、此三十七八年後の思想を見るには其前の大勢を見なければならぬ、明治維新に廣藩置縣階級制度を打破し、十年に新制度と新精神とは急進し、十四年に自由改進の思想が勃興して國會開設となり、米の壓迫を受けたために我文化の劣らざるを證明せんとして、皮相淺薄の歐化主義となつた、而して後年之を止めんとして小學教員の態度に變化を與へ、一方には政教社の組織せらるるあり、急進主義者もあれば漸進主義者もあつて、進歩に就ては一致して居つたので、二十二年に國會が開かれて憲法は制定せられ文明の制度を布かれたのであるが、此の新制度を充分に味ふて運用することは、一部少數の人を餘いては諒解することが出來なかつた、即ち新制度を布かれたるが爲に精神上の動搖を來す虞れがあるから、二十三年に教育勅語を下し給ふたのである、而して一面の社會の階級を見ると、維新の大業を大成したのは士族の階級である、之等は泰西の文明政治の意義を理解して居つたから、行政者及陸海軍人は其階級者である、庶民は泰西文明の何ものなるやを解せず、唯だ政府の指導に依るものであつたのである、鐵道の敷設も船舶の航海も製絲の事業も政府に於て行つた、斯かる大變革の制度を理解したものは士族のみで即ち二十年代に計畫せられたる新制度は、國民

の自覺に基きたる內的要求ではない、二十七八年戰役になつて新制度新精神が漸く効果を表はすことに爲つて來たのである、即ち日清役に從事したものは明治の出生者にして、新教育を受けたる壯丁であつたから忠勇義烈の行動を爲して功名を擧げられた、その戰役後、國民の自覺が高まつて政治經濟產業の上に、自から之を計畫し經營する樣になつたのでありますが、高度の文明を有する外國に接觸して自分に取り入れたいと云ふ必要を感じたが、それは物質的方面の改善と云ふ事で、經濟的實業產業上の設備を爲すべき事に力を致したのである、而して內的生活の變化はそれ等の物的改善の後に來るのは自然の結論である、明治の初年摸倣的なりしものが、二十七八年後に於ては國民が覺醒せらるゝ樣になつた、三十年代に於ては、始めて自覺した動搖の徵候が表はれたのである、彼の藤村操が人生不可解なりと叫んで華嚴の瀧へ沈んだのは、藤村一人のみでなく當年の青年を代表せるものである、我新制度新計畫の中に橫はれるものは何であつたかと云ふに、個人主義自由主義である、この主義が民族的傳說と調和し難い點が存して居つたから、二十年より三十年代に至る間はこの葛藤の狀態であつたのである、之が日露戰役前後の大勢である。

日露戰役は何の爲に起つたか、韓國は我國防上の安全の爲に必要である、韓國を保全せん爲には滿洲の地を壓迫せられざるを要する、然るに露は兵を起して滿洲占領の事實を呈したので、我國は國防上の安固を求むる爲に撤兵を要求したが、日本の要求に應じて撤兵をせなかつた、露の東方經營と經濟政策とは日本の國防上衝突を來して、遂に戰を起すに至つたのでありますが、交戰十六ヶ月に亘り、二十億の巨資と數十萬の壯丁の生命を犧牲として幸榮ある勝利を得たのであります、斯く日露の戰役は、甚大なる犧牲を拂ひ國運を賭したる戰である、その戰役の當時、國民は高度の愛國心を現はして居る、即ち軍事內國債は應募高よりも五倍半も多かつた樣な事實に見るも、敵愾心の强かつたことが分る、而し戰後の結果は何うであつたらう

か、勝つた〳〵と喜んで居つた國民は、土地は取れず償金は取れないので、興奮して居つた人心は、爲に萎靡沈滯の狀態になりましたから、經濟上には何等の事業も起らない、然るに時の經過と共に奮慨心が靜まり講和の意味を理解する樣になつた、處が國民の經濟狀態は何うてあるかと云ふに、六億八千萬の內國債を募つたのは外國に出て居らない、加ふるに八億の外國債は內地に融通せられたから、戰役に關係した商人等の懷中は富裕になつたのは事實である、戰時募債のあつたに係はらず銀行預金は減じて居らない、三十七年十二月末の銀行預金は、三億三千六百五十三萬圓であるが、三十九年三月は四億六千三百萬になつて居る、一億三千萬の增加がある、戰役後南滿鐵道が起り其他機業的事業が表はれた、從て泡沫會社が續々として開店するやうになりまして、四十二年頃より經濟界は變調の形勢と一轉化したのてある、而して社會生活道德生活に深刻なる影響を與へ、國民生活は放縱奢侈の風潮となり、滔々として淫靡華美の傾向になつたのてあります、又一面には、政治敎育陸海軍の擴張をも青年の力によりて行はんとあせつて居るが、之を爲すことが出來ないので高等遊民が多くなつて來た、そこて一轉して實業に志して貨幣を得んとして居る、貨幣に對する希望熱が亢進して居る、それが國民生活の實狀てある、要するに國民思想の動搖は左の四項に分れて居ると思ふ。

(一)國民が淺薄なる消極的自覺を得たるも、積極的自覺に入る場合に戸惑したので動搖して居ると思はる。

(二)新らしき思想と在來の傳說との間に生じたる葛藤のために動搖して居るとも見へる。

(三)交通機關によりて各種の思想が輸入せられ、之を消化せんとして居る間に再び來る思想の爲めに動搖する。

(四)混雜の中に異端邪說が爪牙を逞うする社會共產主義が起つて動搖を與へる。

以上之等が動搖の原因と見らるゝので、此の原因に對する適當の按排指導を示すことが大事てあります。

慚愧の美服

（天晴會準備團成る）

於伊豫之客舍　影山謙二

當に知るべし此の人は慚愧の服を着て佛に歲助せられ上り久からずして當に阿耨多羅三藐三菩提を成すべし　（結經）

中央帝都に於ける日蓮主義者の大法說が、如何なる感興を以て各地方の有識者間に迎へられつゝあるかは、深き注意を以て關註せられて居る果然伊豫國八幡濱町醫科醫北川彰氏は、既往二十年間の長き基督敎を奉じ、誰れ知らぬ者なき耶蘇の大熱心家なりしが、高島平三郎氏の「心理學上より見たる日蓮上人」を讀みて、釋然として開悟する處あり、遂に同町の日蓮宗山田淳正師を訪れて、日蓮主義研究の順序方程針路を聞かれて居つた。是時に當り予は偶然同町に到つて山田師より此の次第を聞いたので、直に北川氏を訪ふて、「捨邪歸正」を慶說し、一見直ちに舊知の如く、「異體同心」の交と成り、數談交々、聖祖の大人格大主義大德化の壽世的なるを悅びぬ。「身後百年の名は生前一杯の酒に若かず」底に、無明の毒酒に醉ふて歷めざる狀態を驚いた氏は予の訪問が奇蹟の如くに感受せられてか、平素の知己明友に向つて、一會相催すべく會同を促された。會者は少數なりしも、清水警察署長、高本振田兩敎師、山田淳正師と予と、六七人の小集會を北川氏の宅に開いた。北川氏は會同の趣意として『日蓮上人の大主義は單に日本人たる我々のみの爲めに私すべき宗敎にあらず、實に一大明敎で有る事を自覺したから、從來奉じたる基督敎を捨て「日蓮主義者」と爲りたり』との、眞情を告白せられ。予は我日本國は法華經の大敎護の下に全世界を統一すべく、思想的帝國主義を發揮すべき大責ある事、且つ吾等國民は此使命を果たすべく「聖祖の天兵」として存在せる意義を自覺せざるべからざる事、而して「國浮同歸」の端は、先づ日本國の同歸に在り、日本國の同歸は、吾等個人の信行より起る事を述べた、更に敎義上に付て四五の質問が出たので、之れに對しては山田師が懇切に祖書を引いて明答せられ、諸氏も大に啓發せらるゝ處が有つた。斯くて數談笑語の間に、近き將來に「八幡濱天晴會」を組織すべく、「天晴會準備團」として同志を糾合し「毎月第一、第二の土曜日」に各員會合して、法華經及び祖書研究の申合せを爲せり嗚呼、多幸なれ健全なれ準備團、孔子曰く「一人仁あれば一國仁に起り、一人讓あれば一國讓に起る」と。法華經に曰く「慚愧清淨にして佛道を志求するものあらば、當に是等の爲めに廣く一乘道を說すべし」と。聖祖曰く「但し御信心によるべし、つるぎなんどもすゝまざる人の爲めには用ゆる事なし、法華經の劍は信心のけなげなる人こそ用ゆる事なれ、鬼にかなぼうたるべし」と、又曰く「心に信心の水澄まば利生の月宿る」と、又曰く「一滴をなめて大海のしほをしり、一華を見て春を推せよ」と、又曰く「惡しき名さへ流がす、況んやよき名をや、何に況んや法華經の御爲に流せる名をや」と、又曰く「萬人の惡者に譽められんよりは一人の智者に譽められよ」と、又曰く「爾前經の心は父子各別の談道なり。然る間威佛これなし。今の經の時、父子の天性を定め、父子一體と談ぜり、父母の威佛則子の威佛也、子の威佛則父母の威佛也」と。嗚呼、夫れ志求の士、陽法の人、勇猛なれ、堅固なれ、精進なれ「寶處近きに在り」、「日蓮前き駈したり吾黨共、二陣三陣と續て迦葉阿經にも勝れ、天台傳敎にも超へよかし」の綸令に聞け、進め！進め！

活動史

軍國の國民思想訓練は大事の中の大事である我日蓮主義者は全力をこの活動の方面に傾盡して居る其概況を記さん

▲十月二日淺草法成寺——關田養叔師講演
▲四日四谷法恩寺——熊井本光師講演
▲六日淺草妙經寺——三上義徹師講演
▲八日府下品川本光寺——笹川日堂師講演
▲同日府下新井宿善慶寺——野口日主師講演
▲同日小石川本念寺——三上義徹師講演
▲九日府下品川町清光院——石川顯隆師講演
▲同日本郷駒込願本寺——石井暚應三上義徹野口日主師講演
▲十日小石川本教寺——熊井本光師講演
▲同日府下品川眞了院——笹川日堂師講演
▲同日淺草慶印寺——野口日主師講演
▲十一日淺草圓常寺——熊井本光師講演
▲十二日府下品川妙國寺——笹川日堂師講演
▲十三日府下品川妙蓮寺——石川顯隆師講演
▲十四日淺草盛泰寺——關田養叔師講演
▲十五日府下品川本榮寺——笹川日堂師講演
▲同日淺草寛受院——鈴木日雄師講演
▲同日牛込久成寺——野口日主師講演
▲同日小石川常願寺——石井暚應水野乾心國分顯有三上義徹師講演
▲十六日統一團地明會——本多日生師講演
▲十七日巢鴨蓮華寺——三上義徹師講演
▲十八日統一團——牧田英明三上義徹石川顯隆本多日生師講演
▲同日赤阪常玄寺——今成日晉師講演
▲二十日早稲田正法寺——熊井本光師講演
▲二十三日谷中本授寺——關田養叔師講演
▲二十五日統一團——國分顯有熊井本光鈴木日雄師講演
▲十一月一日統一團——高木本順三上義徹野口日主師講演
▲七日統一團に顯本青年布教團發會——吉田堅晴大森體勇國分顯有武田顯龍小西體道熊井本光吉永義彦師講演
▲八日統一團——石井暚應高木本順熊井本光師の熱烈なる講演ありたり
▲本化記者團——十月二十日芝二本榎承教寺本堂に開催二百餘の熱心なる參聽者あり

開會の辭　加藤文雄
佛教統一の人格的基礎　高鍋日統
名體俱實　石田顯隆
日蓮上人生死觀　三上義徹
神聖なる憲章　加藤文雄

▲白山會——小石川白山坂上同會にては毎月一日十五日第一第三日曜の午後六時より講演を開催し三上本誌記者講演を擔任す
▲十月廿五日日本橋蠣殼町田中方三上師講演
▲十月廿七日本所千歳町揭武館三上師講演
▲十一月二日本郷淺嘉町倉橋方三上師講演

▲千葉縣▼

忠烈なる勇士は出て、敵と戰ひ今正に醒なり内に在るもの軍國民の態度を持して此の後援の任務に當らざるべからず此の士氣を作興するは急務中の大事なりとす我徒はこの重大なる責任を果さんために戰時傳道を行へり其効果の多大なりしは今後地方人の活動により て見るを得べし概況左の如し

▲十月十八日午後千葉郡千葉町本圓寺開催

開會の辭　廣部永眞
時局と日蓮主義　竹内無着
法華經の大要　笹川日堂

▲同日午後山武郡東金町蓮方妙福寺開催

開會の辭　金坂乾受
生活と宗教　森川寛行
時局と日蓮主義　中村日錦

▲同日午後山武郡大網蓮華寺開催

開會の辭　井口善叔
時局と宗教　成島泰行
不滅の信念　山根日東

▲十月十九日午後市原郡市西村泰安寺開催

開會の主旨　井口善叔
活ける信仰　竹内無着
日蓮主義の本領　笹川日堂

▲同日午後東金町押堀最教寺開催

開會の辭　富田林惠
今正是其時　森川寛行
時局と日蓮主義(其二)　中村日錦

▲同日午後同郡柳橋能念寺開催

開會の辭　石橋慈愛
戰爭と佛教　成島泰行
奮闘主義　山根日東

▲十月二十日午後君津郡中島本永寺開催

開會の辭　御園榮項
有形と無形　竹内無着
道義と信仰　笹川日堂

▲同日午後同郡公平村松之郷本松寺開催

開會の辭　横濱日藥
生の宗教　森川寛行
時局と日蓮主義　中村日錦

▲同日午後大網町沼向長福寺開催

開會の辭　北田信昌
人生の價値　土屋賢生
戰時と農村　成島泰行
日蓮に依て日本國の有無はあるべし　山根日東

▲同日午後長生郡七渡龍經寺開催

時局と立正安國　齋藤海叔
日蓮主義と國運發展　關田養叔

▲十月二十一日午後君津郡舟目本立寺開催

開會の辭　飛山日甫
大義日什聖人　竹中無着
忍辱の中に住せよ　笹川日堂

▲同日午後同郡松尾町田慈妙國寺開催

宗教の心得　金坂乾受
時局と日蓮主義　中村日錦

▲同日午後大和村福袋本福寺開催

開會の辭　堂亮雄
理想と現實　成島泰行
日本の柱　山根日東

▲同日午後長生郡關本法寺開催

時局と立正安國　齋藤海叔
日蓮主義と立正安國　關田養叔

▲十月二十[illegible]日市原郡湯津村喜多壽福寺開催

開會の辭　大塚無偏
活ける信念　竹内無着
立國の基本　笹川日堂

▲同日午後同郡大平村廣榎圓壽寺開催

開會の辭　太田玄儒
力　森川寛行
時局と日蓮主義　中村日錦

▲同日午後丘山村蓮臺清蓮寺開催

開會の辭　渡邊玄雅
大正國民の襟度　成島泰行
士氣作興　山根日東

▲同日午後長生郡豊鳴本大寺開催

時局と立正安國　齋藤海叔
日蓮主義と國民性　關田養叔
熱烈なる論辯は強く人心の秘奥に響き甚大の感化を與へたり

▲十月廿三日午後長生郡長柄村妙典寺開催

開會の辭　山本賢乘
新禱に就て　山田誠心
獨國に對する吾人の覺悟　河野見中
人生の道　大川日教
日蓮上人と國家　渡邊乾航
國民思想の歸趨　笹川日堂

▲同日午後山武郡源村布田乘王寺開催

開會の辭　富田良雄
眞理を求むる者最後の勝利者也　日蓮主義戰爭觀及國民の覺悟　暮玄靜
野口日主

▲同日午後白里村等覺寺開催

開會の辭　德會瑛
日蓮主義と家庭　龜崎日憲
日本帝國と日蓮主義　土屋眞容
國民の元氣　山根日東

▲同夜小沼田要木寺講話

節制　土屋眞容
日蓮主義と修養　山根日東

▲同日午後山武郡土氣本郷善勝寺開催

開會の辭　金坂教隆
所感　渡邊快整
人の務　木村乾中
日蓮主義の勃興　今成日晉

▲十月廿四日午後長生郡長柄村滿蔵寺開催

開會の辭　大川日教
五種の妙行　山本賢乘
安心　山田誠心
信仰と生活　渡邊乾航
法華經中心の日本國　笹川日堂

▲同日夜同寺青年會開催

開會の辭　大川日教
宗教意識の變遷　笹川日堂

▲同日午後印旛郡佐倉町妙經寺開催

開會の辭　田邊慎一
惟仰思想の覺悟　日暮玄靜
報國三世論　野口日主

▲同日午後福岡村上谷飯島寺開催

開會の辭　龜崎日憲
時局と日宗信徒の自覺　土屋眞容
降魔の利劍　山根日東

▲十月廿五日午後長生郡長柄村光明寺開催

開會の辭　山本賢乘
大和魂と佛教の關係　河野見中

教育と宗教　今井俊貞
宗歌に就て　渡邊乾航
日蓮上人の行化　從川日堂

▲同日午後山武郡用草眞福寺開催
開會の辭　夏目智晉
信仰の花實　日暮玄靜
軍國民の心得及修養　野口日主

▲同夜長谷川福太郎方にて青年會開催
勢能の說　夏目智晉
青年の修養に就て　野口日主

▲同日午後片貝本堅寺開催
開會の辭　藤崎通明
日蓮上人と國民　龜崎日憲
大和民族の名譽　土屋眞容
軍國民の覺悟　山根日東
開會の辭　西村會立
所感　富田林惠
吾教徒の理想　木村乾中
唯心所現　今成日誓

▲十月廿六日午後長生郡押日來光寺開催
開會の辭　山田誠心
日蓮上人の信仰　大川日敎
人生の幸福　渡邊乾航
精神的努力　從川日堂

▲同日午後千葉郡多部田最福寺開催
開會の辭　小川玉秀
信仰の花實　日暮玄靜
軍國民と日蓮主義　野口日主

▲同夜同所にて開催
開會の辭　小川玉秀

覺悟　廣部永眞
眼耳鼻舌身意　野口日主

▲同日午後小關於覺寺開催
開會の辭　小幡觀正
日蓮上人の人格　龜崎日憲
宮仕へと法華經と思召せ　土屋眞容
天晴地明　山根日東

▲同日午後山武郡永田光昌寺開催
開會の辭　栃木日導
唐辛の生　廣部乾山
體曲れば影斜なり　木村乾中
精神修養と法華經　今成日誓

▲十月廿七日午後茂原町箕輪圓藏寺開催
開會の辭　宇津木玄英
最大の力　竹內顯領
現實と理想　渡邊乾航
正義人道の本源　從川日堂

▲同日午後印旛郡山梨松源寺開催
開會の辭　西部睿瑞
報恩　日暮玄靜
大日本國民の覺悟　野口日主

▲同夜同所開催
開會の辭　西郡睿瑞
恥を知り正義を行へ　日暮玄靜
日本は女の國なり　野口日主

▲同日午前十一時東海義塾長大塚誠太郎氏生徒二十五六名(中學三四年程度)を引率して參拜修養講話懇請に付左の講話をなす
意思の訓練　山根日東

▲同日午後豐成村前の內常覺寺開催
開會の辭　矢田智光

軍國民の修養　土屋眞容
日蓮上人と千葉縣民　龜崎日憲

▲同日午後山武郡當野正法寺開催
開會の辭　秋葉純一
日蓮主義の修養　富田林惠
戰爭と天祐　木村乾中
欲望と信仰　今成日誓

▲十月四日山武郡駒込東榮寺に開催
日蓮上人の愛國思想　秋葉純一
大和心　廣部乾山

▲十月五日同郡土氣木郷町善勝寺に開催
戰爭と宗教　富田林惠
日蓮上人の忠君愛國　秋葉純一

▲十月十七日同所顯本護持會開催
迫害と日蓮上人　秋葉純一
妙法と宇宙　金坂敎隆

▲同十九日同郡當野正法寺に開催
開會の辭　秋葉純一
國民の覺悟　廣部乾山

▲同二十三日同郡小中覺行寺に開催
時局觀　秋葉純一

▲十一月六日本納町板倉藤次郎宅に開催
開會の辭　吉見俊敎
日本國民の覺悟　長岡育應
修養の根本義　富田林惠
日本の柱　鈴木正二
日蓮上人の對難觀　秋葉純一

▲十月九日午前山武郡貝塚蓮成寺に於て戰時祈禱午後講演開催「野口會英開會の辭」「北田信昌省順正法」「渡邊玄雅戰爭と信仰」「土屋眞容戰爭と信念の偉力」「小竹俊雄日蓮上人と精

力主義」「成島泰行小事不可侮」

▲長生郡新治村大澤法命會講演「開會の辭島本順祐」「日蓮主義と勇氣吉見俊敎」「宗敎と戰爭富田林惠」「開會高石增二郎」

▲十月二日市原郡內田村原田本傳寺にて戰捷大祈念會を執行し午後講演開催「開會の辭栗原日瀧」「祈禱に就て山田誠心」「戰亂と日蓮上人河野見中」「國運發展山本賢乘」「爲同一致竹內顯領」「佛敎より見たる國光華平本順」「國民の覺悟大川日敎」「日蓮上人の國家觀渡邊乾航」

▲同月三日長生郡睦南町長圓寺に於て戰捷祈念會を奉行し終て大川日敎山田誠心山本賢乘竹內顯領渡邊乾航師等の時局に關する講演あり

▲同月五日茂原町箕輪圓藏寺に於いて戰捷祈念會を執行し宇津玄英山田誠心山本賢乘竹內顯領河野見中今井俊貞渡邊乾航師講演あり

▲同夜箕輪青年團の希望に依り「題目の意義山田誠心」「反省山本賢乘」「戰亂と日蓮上人河野見中」「青年と修養竹內顯領」「文明の日本國の現代今井俊貞」「眞の勇氣渡邊乾航」等の講演ありて多大の感動を與へたり

▲巡回布敎の記(有田安道記)

▲十月四日伊豆伊東妙蓮寺午後七時說敎
三力合成に就て　有田安道
日本國と日蓮上人　萩原啓門

▲五日靜岡縣函南村妙高寺午後開講
開會の辭　木下鈞通
歡喜の泉　有田安道

本佛の偉力　萩原啓門

▲六日同縣三島本妙寺午後開講
勇士の人生觀　有田安道
軍國民の精神修養　萩原啓門

▲同夜同所に開講
勇士の人生觀　有田安道
人の道　萩原啓門

▲七日午後同縣北松野妙松寺婦人會青年會戶主會總會を閉く
開會の辭　大津日文
大和魂と佛敎　有田安道
大正國民の自覺　萩原啓門

▲八日夜同縣太田妙安寺說敎
身延御抄に就て　古定賢正
信後の生活　有田安道
宗敎心の調整　萩原啓門

▲九日夜同縣吉美妙立寺戰勝祈禱法要を嚴修し了て開講
挨拶　白井日慶
如來使　有田安道
正しき本尊に信仰を捧げよ　萩原啓門

▲十日午後同縣白須賀妙泰寺戰捷祈禱法會あり終つて開講
開會の辭　高橋遵碩
軍國の精神訓練　有田安道
戰勝祈禱に就て　萩原啓門

▲同夜再開
開會の辭　高橋遵碩
明治天皇と日蓮上人　金光孝碩
軍國民の精神訓練　有田安道

大日本國と法華經　萩原啓門

▲十一日夜愛知二川妙泉寺戰勝祈禱會執行了て開講
開會の辭　藤木智光
人生の行路　有田安道
法華經より觀たる國家觀　萩原啓門

▲十二日夜豐橋市妙圓寺に就て宗祖御會式を嚴修しそれより說敎
如渡得船に就て　有田安道
宗祖日蓮大上人の智慧　萩原啓門

▲十三日午前同所に於て法要執行了て說敎
人生生活の要諦　有田安道
最高の信仰　萩原啓門

▲十四日同縣野田法華寺午後皇軍全勝の祈禱法要を執行し了つて直に婦人修養會の講演に移る
開會の辭　西山日瀧
國力充實　有田安道
婦人の修養に就て　萩原啓門

▲同夜戶主青年を中心として開講
開會の辭　西山日瀧
國力充實　有田安道
信仰の統一　萩原啓門

▲十六日午後同縣緒川越境寺國民思想講演會開催
開會の辭　長谷川日濟
大日本帝國の天職　有田安道
國民思想の調整　萩原啓門

▲十七日午前名古屋常德寺戰勝祈禱會並に宗祖報恩會嚴修後說敎
信仰の活力　有田安道

求道心　萩原啓門

▲十八日午後岐阜縣大垣常覺寺に說教開催
難苦得樂に歎て　有田宏道
唯我一人能爲救護に歎て　萩原啓門

▲十九日夜福井縣今庄善勝寺開講
開會の辭　暫智了
八萬超勝の國　有田宏道
本佛釋尊の大慈悲　萩原啓門

▲廿日午後同縣高木信行寺講演を開く
開會の辭　石橋會章
人格の完成　有田宏道
日本國將來の宗教　萩原啓門

▲同日夜間石橋有田萩原師等の說教あり

▲廿一日午後同縣南居妙正寺に說教
信仰の意義　有田宏道
實在の信仰　萩原啓門

▲同日夜間講演
安心の源　有田宏道
人生の光りは信仰にあり　萩原啓門

▲廿二日同縣山內本行寺講演
開會の辭　朝倉一乘
心こそ大切なれ　有田宏道
光輝ある信仰　萩原啓門

▲同日夜間說教
救濟の力　有田宏道
人法不二　萩原啓門

▲廿三日夜福井市妙經寺
開會の辭　增田彰道
世界統一　有田宏道
日蓮主義の信仰　萩原啓門

▲廿五日午後福井妙隆寺講演會を開く
活力の根元　有田宏道
日蓮上人の意氣　萩原啓門

▲同夜蓮原巡泉いろは館に於て時局講演會を開く
大和魂と日蓮魂　有田宏道
本尊論　萩原啓門

▲廿六日午後石川縣笠屋本成寺開講
開會の辭　能仁事應
是則勇猛是則精進　有田宏道
大慈悲　萩原啓門

▲同日夜間再開會
是則勇猛是則精進　有田宏道
大慈悲　萩原啓門

▲京　都▼

▲十月一日午後二條妙滿寺に國禱會を修し平和克復の新願を爲せり

▲三日夜妙滿寺に帝大三高の學生研究會あり
法華經大意　川崎英照

▲午後大慈院に婦人會開催
聖龍の大德　銀井乾升

▲同日川東本正寺に婦人會例會を開く
信仰の力　三須教英

▲夜感歎院に護正會例會を開き川崎英照師の講演あり

▲十二日妙滿寺に宗祖聖人御會式を厳修す
法華經の重要教義　梶木日種

▲十五日千本壽量寺に例會演說を催す
處は人を感化す　三須教英
日蓮主義の信仰　石井寛俊

▲十六日法光院に妙光婦人會開催
簡御器抄の器に四失あり　金光光碩

▲十七日夜妙滿寺に學生研究會の例會開催
日蓮上人の教義及人格　川崎英照

▲同日三條石見知水宅に聖祖門下例會講演
「戰時國民思想の選擇」　金光光碩

▲二十四日午後妙滿寺に婦人會を開く
三事相應　木多日生

▲同夜妙滿寺に公開演說會を開催す
宗教と人生　石川顯隆
國民の覺悟と日蓮主義　木多日生

▲廿五日午後帝大三高工學生の組織せる京都學生研究會の主催として帝大學生集會所に大多大僧正を聘して講演會を催す
開會の辭　久保彌太郎
大思想家として日蓮上人　木多日生
講演後木多大僧正金光川崎西村喜一郎氏及び學生幹部の記念撮影を成し茶話會を開きたり

▲夜妙滿寺に天晴會の公開演說會を開く
開會の辭　兼田幹事
日蓮上人の大志願　木多日生
在京聖祖門下同志會にては時局に對し大講演會を數ヶ所に開き金光川崎師等出演して活動を成せり

▲三十一日天長節祝賀を期し午後六時松原下る上田本店に店員四十四名を集め修養會を開く
開會の辭　上田順一郎
明治天皇の聖德　金光孝順

▲奈良縣▼

▲十月廿三日午後郡山町常光寺に地明會發會

式を擧ぐ金光孝碩師は各方面より信仰の必要を論じ其の信仰は日蓮主義の信仰なるべき事を說き示したり郡山は天理教の根源地なれ共時代の要求する所が熱心なる日蓮主義研究者十三餘名顯れ天晴會設立の議成り時を期して同地郡役所を會場として發會式を擧ぐべしと云ふ一日も早く實現されんことを望む

▲大　阪▼

▲十月十一日午後七時大阪生玉前町覺圓寺に講演會開催
救世の大道　京藤義應
破迷信　三好信道
日本國と法華經　梶木日種

▲二十二日午後生玉前町覺圓寺に婦人會開催
時局に對する婦人の心得　京藤義應

▲二十三日午後二時西高津中寺町蓮成寺に講演會開催
宗教信仰の効果　本多日生
同夜大阪關本同信會並大阪天晴會合同の主催にて蓮成寺に於て戰時大講演會開催
開會の辭　梶木日種
法華經と日本國　石川隆顯
軍國と日蓮主義　本多日生

▲兵　庫　縣▼

▲十一月廿六日午後姬路僧行社にて將校婦人會の爲に講演
宗教心の調整　本多日生

▲同夜姬路武德殿に天晴會開催
開會の辭　堤少佐
日本國民の反省と自覺　本多日生

▲廿七日午後騎兵第十聯隊附將校兵士の爲精神講話を開く
真兵真民　本多日生

▲同夜姬路妙立寺に於て講演會開催
開會の辭　武內大佐
理想的國家と理想的宗教　本多日生

▲廿八日午後同じく妙立寺に開催
軍人と信念　本多日生

▲同夜姬路地明會開催
三事相應　本多日生

▲廿九日僧行社にて將校の爲に講演
我國思想史の體系　本多日生

▲同夜姬路師範學校に於て講演
倫理思想の徹底と調整　本多日生

▲福　岡　縣▼

▲「九月廿九日三池郡銀水村上龜崎區青年會」「十月四日下龜崎區青年會」「五日同村內山區青年會發會式」「六日二川村東濃籠青年同志會」「七日銀水村木村區青年會」「十四日江浦村湯場區青年會」「十八日川村淺瀨青年會」「十九日銀水村能田比青年會發會式」「廿五日中鎌村青年會」「廿六日江浦村青年會」「廿七日同村三開區「廿八日同村久保田」出海俊義師講演せり

▲十二日久留米市本泰寺に例月講演會開催
誠心の力　中原通應

▲廿八日午後七時本泰寺檀家大月爲吉氏宅にて講演會開催
靈魂の不滅に就て　大月友吉
人生の眞實相　中原通應

▲三十日本泰寺に於て龍口御祖會法要を勤修し晝夜に亘り說教を開く
統一的大本尊　平岡本信
信仰の撰擇　吉見法榮
九月十二日　中原通應
各地に於ける傳道は日蓮主義の卓越せる理義を發揮し人心に活力を與ふるに努めつゝあり

▲岡　山　縣▼

▲天高く氣清き十一月一日備前和氣郡和氣町大字曾根字靈山關西一の新佛路日本一の大題目開眼の式は終行されたり午前六時半一發の燈火を相圍に保員一同部署に着き午前九時第一號鐘にて本成寺に全部集合奏樂讀經あり夫れより午前十時出發御經旗を先導に稚兒四十名の美々敷姿は冠ら浮世絵のやうに續き次に本經寺祀野本成寺原田本行寺能仁僧正中川師佐々木英春師建設委員其他數千名相續いて午前十一時御祭壇前に着し開眼式の式典を修行し午後一時半終了餅苺あり尙終日煙火數十發を打揚げたれば朝よりの人出無慮三萬と註せられさしも廣き金剛礦を初和氣町も人を以て埋められたるの觀ありて盛大なりと云ふ

▲廣　島　縣▼

廣島市松川町妙詠寺に於ては十月十三日宗祖の御會式を紆機とし備前和氣本成寺原田日勇師を聘し十日より十三日迄四日間日夜講演を開催せるが非常なる盛況を極め島田顯慈原田日勇師の熱心なる廣長舌ありたり

△時　日——十一月二十二日午後一時
△會　場——芝二本榎、日蓮宗宗務院

■聖祖門下學生大會（大講演會　大懇親會）

▲來會を希望す▲懇親會費金三十錢▼

△毎日曜日午後一時半開會

■統一閣大講演會

▲淺草清島町電車停留場側洋館▼

▲毎月一日十五日第一第三日曜（午後六時開會九時閉會）

■白山會講演會

▲小石川白山坂上常檢寺（白山坂上停留所より西片町通）

日宗法衣專門
青雲帽　希教服　袴
此外法衣付屬品一切

京都佛具屋町五条
飯田法衣店
振替大阪六八四七

小店調製の品は價格低廉品質純良且裁縫精巧等は勿論殊に格好の尊嚴に至つては到底他店の模倣を許さゞる自然の特徴を有し候
小店は御注文の御素志に反する如き不手際不親切等は斷じて無之御申越次第御滿足迄誠意見本を提供し萬遺憾なからん事に期し居り候

本誌の定價　▲一部郵稅共金六錢五厘○半年分金參拾九錢　一ヶ年金七拾八錢。新購讀者は前金拂込されば發送せず

廣告料　表紙うら。うら表紙一頁金拾圓半頁六圓。普通廣告欄は一頁金七圓半頁四圓希望の者は紹介の事

雜誌及廣告料金拂込　東京小石川白山前町十七番地三上義徹振替口座東京二八八四〇番へ拂込むべきこと

▲交換——新聞雜誌。新刊書の寄贈其他申込編輯に關する用件は編輯所へ御送附御願候

▲讀者の特權——本誌讀者にして日蓮主義に關する理解を發表せんとするものは、一行廿四字詰に認めて送らるべし本誌に掲げて廣く世に紹介すべし（但し採否は編者の權内とす）

▲講演の需めに應ず（申込は編輯所へ）本誌讀者にして國のため人の爲め日蓮主義講演會を開かんとするものは御申込次第何時なりとも應諾可致候（但し旅費は實費だけ）

大正三年十一月十五日印刷發行

發行兼編輯人　東京市小石川區白山前町十七番地　三上義徹
印刷人　鈴木日雄
發行所　東京市淺草區北清島町十四番地　統一團（電話下谷六千三百十番）
編輯所　東京市小石川區白山前町十七番地

第二百三十七號
明治三十年二月十四日第三種郵便物認可
大正三年十一月十五日發行（毎月十五日發行）

◀軍國民の必讀すべき書▶

天晴會講演錄

（第貳輯）（價格金貳圓也 郵稅金拾貳錢也）

▼本書は現代知名の諸先生が日蓮上人の人格及教義の研鑽を發表したるもの、日蓮主義が眞理批判の上に。また國民思想教養の上に。殊に國家存立の關係に於て、如何なる地位と權威とを有するかは。須らく本書六百餘頁に亘る金玉の文字によつて之を知るを得べし

内容
林陸軍中將。本多大僧正。井上中佐。小笠原子爵。小林文學士。高島平三郎先生
辻文學博士。松森僧正。五島子爵。姉崎文學博士。柴田一能先生。竹内久一先生
田中智學先生等の講演也

精神の修養
思想の調整

（各一部 金貳拾錢也）
（二部 小包 金八錢）
（一部 郵稅 金六錢）

本書は本多日生師の海軍大學校における精神講話にして。帝國軍事教育會に於て印行したるもの。思想問題に注意を拂ふものは必ず本書を一讀せざるべからず

▲申込——東京市小石川區白山前町十七番地 三上義徹。送金は（振替口座東京二八八四〇番へ拂込む事）

拾貳月號

第二百三十八號

統一

▲大正三年は複雜多樣の歷史也▲

觀よや、歐亞の天地は漠々たる戰雲に包まれ、文明の意義人道の權威は疑問せられたり、而して何時の日か戰局を告ぐべきかは是れまた明かならず、世界文明の爲に深く之を憂ふ

我東洋に於ける決戰の飢捷は、國民齊しく之を謳ふに到れるも、されど是れたゞ軍事戰鬪上の第一結末なるのみ、さきに諸般の問題は錯綜して的確なる斷案は前途なほ遠きを覺ゆ

大正三年に於ける國運は、混雜の中にも幾分の建國的理義を實現するものありしも、內に國民の思想を觀れば、病見多くして其歸趣を失ひ、分裂動搖正しく事實にあらずや、あゝ危哉、此時に當り國と人とに大道を示して活力を賦與する者は日蓮主義あるのみ、日蓮主義は國家發展の動力也、國民躍進の活力也、日蓮主義は佛教內の局部思想にあらず、世界の各思想の全部を內包し之が調節し統一したる大思想也世界人類の歸命すべき大宗教也、我國民はこの大宗教に依て訓練せらるべき特權を有す、須らく公正の見地を持して日蓮主義の本義を味ひ、國民的信念と實力を養ふに努めよ、大に自覺一番して此方向に進み來れ（三上生）